

## 杓子沢 2

猿倉への夏道を捜したが見つけれず、時間ばかり過ぎていく。日没まで後2時間しかない。明るいうちに猿倉へのルートを見つけなければと焦るが、東へ行っても西に行ってもヤブばかりで、夏道が見つからない。猿倉にて待っていると思える菅沼氏や橋本氏のことが気がかりだ。なんとか今日中に下山しなくてはと思い、一度引き返した沢を下りることにした。現在地の標高が1500mなので、高度差にして300m程下りれば、車道にでるはずだ。沢には踏跡がついており、なんとなく下山できそうな様子であった。

加藤氏は、あくまでも沢を下りることには、気がすまないようであった。高度差にして100m、時間にして30分程下降した。そこで流木を足場にして対岸に渉る所があった。流木の下には、激流が流れており、危険な場所だ。私は、ここを渉るのにストックが邪魔になり対岸に投げ捨てた。しかし片方のストックを川床に落としてしまった。幸いストックは流されず岩角に引っ掛かった。苦心してもう一本のストックで拾いあげたが、その様を横で見ていた加藤氏は、非常に危険な感じに見えたようだ。(事実危険であった。この時、加藤氏より「山腹に道が見える」といった声が聞こえた。私はうなずいて、先に沢を下りていった。しばらく下山を続けたが、後ろから加藤氏の下りてくる様子がない。10分程待ってみたが、加藤氏は下りて来ない。何かあったのではないかと思い引き返してみた。先程の危険な流木が流れている所まで戻ってみたが、加藤氏の姿は、どこにも見えない。雪渓を踏み外した様子もない。「加藤さん!」と叫んでみたが応答がない。私は加藤氏が道らしきものが見えると言っていたことを思いだした。加藤氏はその道の様子を見に行き、そのまま下山しているのに違いないと思った。私も加藤氏の後に続いて登って行けば、こんな結果に成らなかったのだが、その時の私には、ヤブの急な斜面を登り返す元気がなく、沢を一人で下りようと思った。加藤氏とは、下で会えるだろうと思った。夕岸に岩岳のスキー場が見えている。下山している途中からこの沢が長走り沢ではないと気づいていたが、ここが長走沢のとなりの中山沢であることに気がついた。幸いこの沢は、特に危険な場所も滝もなく18時丁度に中山沢出合いの車道に着いた。加藤氏と分かれ2時間程の下山時間ではあったが、今朝から10時間以上の行動で疲れきってしまった。猿倉方面に登る車に乗せて頂き猿倉にて待つ菅沼、橋本の両氏の元に戻った。加藤氏は、まだ下山していなかったが、この時は、まさか加藤氏に戻って来ないなんて考えてもいなかった。一時間程すれば、下山するのではないかと思い、中山沢出合い周辺で菅沼氏らと加藤氏を待つが、7時になっても8時になっても加藤氏は下山して来なかった。

もはや今日中に闇の中、下山するという事は、考えられない。加藤氏はどうしたのだろうか。何か事故が起きたのだろうか、それとも道に迷い、ビバークしているのだろうか。

3人で協議した結果、今日は、猿倉に泊まり明日早朝に、加藤氏を捜索しに行くことに決める。猿倉荘は、まだ営業はしていなかったが、管理人に事情を話して、今夜泊めて頂くことができた。

猿倉荘の管理人より遭難の可能性もあるので、万一のことを考え、警察に捜索願いを出した方がいいだろうと言われた。とりあえず白馬の駐在所に連絡した後、大町署より状況確認の電話がかかってきた。

主に聞かれた事は下記のような事柄であった。

1. 遭難者の名前 住所 電話 性別 年齢 生年月日 職業（勤務先）
2. 同行者（岡坂）の 同上
3. 遭難までの行動概略 （なぜ別行動をとったか。）
4. 遭難推定場所 中山沢のどのあたりか
5. 遭難者の山歴、同行者（岡坂）の山歴
6. 遭難者の血液型
7. 山行届の有無 （なぜ山行届を提出しなかったのか）
8. 遭難者の服装及び所持装備、食料（特にビバークに耐えられる装備かどうか。）
9. 本ルートの過去の経験
10. 現在の救助体制

以上のような事柄を電話で質問された。しばらくして再び大町署より電話があり、明日7時より捜索のヘリを飛ばしたい。ついては、費用が一時間50万程かかるが、家族に了承を取ってほしい。私にもヘリに同乗するようにとの連絡があった。もはや現事態は、遭難と考えなければならない。私は、いまさらながら加藤氏と別行動を取ったことが悔やまれてならなかった。加藤氏の御家族、同志会の運営委員への連絡などをすませて、3人で明日の捜索について協議した。明日4時に菅沼、橋本の両氏で中山沢をつめる。私は、ヘリに同乗するためと連絡用に猿倉に残る。以上の打合せをすませ明日にそなえ加藤氏の無事を祈りながら床についた。寝床について、さまざまな可能性を考えてみた。加藤氏と分かれた後、沢には特に危険な所は無かった。加藤氏が下山して来ないのは、やはり道を求めヤブこぎをしている内に日が暮れたのか。沢へ戻ってくれていれば明日見つけられるはずだ、などを考えていると神経が高ぶりほとんど眠れなく早朝をむかえた。

翌朝、予定通り4時に菅沼、橋本氏は捜索に出て行った。小屋の管理人の御好意でトランシーバーをお借りした。結果としてこのトランシーバーのおかげで、ヘリを飛ばさないですんだ。いつでも連絡が入るようにトランシーバーのスイッチを入れっぱなしで、一人猿倉荘で待つ。5時半頃、菅沼氏より標高1300m地点にて、加藤氏を無事発見したとの連絡がトランシーバーから入ってきた。やはり加藤氏はビバークしていたのだ。私は、すぐ加藤氏の御家族及び大町署に無事の連絡を入れた。

以上が加藤氏の発見までの経過である。

帰路、大町署に寄り報告と挨拶をすませ、帰宅したが、大町署より特に山行届の件と別行動を取った件を強く注意された。今回の捜索の件で菅沼氏、橋本氏には、たいへんな迷惑をかけてしまった。また同志会のメンバーの方にも御心配をかけてしまいました。深くお詫び申し上げます。また猿倉荘には、大変お世話になりました。紙面を借り御礼申し上げます。

(岡坂 準一 記)

